

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	鎌田 安里紗
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	井庭 崇
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授	一ノ瀬 友博
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授	石川 初
	副 査	鳥取大学地域学部教授	大元 鈴子	
学力確認担当者：				
鎌田安里紗君の学位請求論文は「生物多様性・自然資本の保全のための協働実践の研究—パターン・ランゲージによる記述と分析—」と題するものである。本論文は、地域での生物多様性・自然資本の保全のための協働実践について、パターン・ランゲージの形式で記述し、協働の創出と継続のためにはどのような実践が重要となるのかをとりまとめた。 パターン・ランゲージとは、よい結果を生み出している活動の実践者が持つ経験則を小さな単位（パターン）で捉え、それらを体系的にまとめたものである。それぞれのパターンでは、ある「状況」で生じやすい「問題」、それを回避してよい状態を実現するための「解決」の方法、そして、それによってもたらされる「結果」が記述される。本研究では、多様なステークホルダーの協働によって地域の自然を守り活かそうとする活動について、2つの角度から調査を行い、活動を進めてきた者が各段階で何を考え、どのように対応してきたのかという実践知を把握し記述している。 第一に、徳島県、沖縄県金武町、広島県北広島町を先進事例地として、事業者、行政、市民団体、教育機関、専門家等へのインタビューを通して、活動の立ち上げから現在に至るまでにどのような働きかけや工夫が重ねられてきたのかが取りまとめられている。徳島県では24パターン、金武町では23パターン、北広島町では22パターンが見出され、それらは、合意形成を促進する技術、主体間のコンフリクトを未然に防ぎ信頼関係を構築する技術、順応的ガバナンスを動かすための技術として意味を持つことが示された。 第二に、特定のアクターの立ち位置ではどのような実践が重要となるのか、複数地域での活動を越境して捉えている。本研究では「専門家」というアクターに着目し、上記3地域とそのほかの地域で協働に携わった経験を持つ専門家へのインタビューを実施し、36パターンを取りまとめた。これらパターンによって、地域を主体として活動をデザインし、信頼関係の構築と合意形成を促し、持続的で自律的な仕組みをつくるために、専門家としてどのような実践が可能なのかを体系的に捉え、提示している。 本論文は全8章で構成されている。 第1章では、生物多様性・自然資本の保全を現場で実践していくために重要となる「協働」に係る概念の整理と、その実践に関する先行研究の検討、そして研究の目的について				

て整理が行われている。

第2章では、本研究を進める上で軸となる、記述と分析のための方法としてのパターン・ランゲージの考え方と、作成のプロセスについて述べられている。

第3章、第4章、第5章では、多様なステークホルダーの協働によって生物多様性・自然資本を守り活用するための実践が進められている3つの先進事例について報告されている。活動の経緯と、その中で活動を推進してきた者が心がけてきたことや、実際に起こった問題にどのように対処してきたか等について把握するために、インタビュー調査が実施され、そこから取りまとめたパターン・ランゲージについて、先行研究を踏まえて他地域での活用可能性が考察された。

第3章では、「生物多様性地域戦略」の策定に係る協働を通して、市民団体の力を高め、地域での活動の基盤を構築してきている徳島県について調査・分析が行なわれている。第4章では、マングローブという象徴的な種を活かし、町の基幹産業（観光業）を自然資源の保全活用を通して組み立て、政策に落とし込んでいる沖縄県金武町について調査・分析が行われた。第5章では、町役場・地域商店・教育機関などを結びつけながら、地域の教育・経済の成熟と地域の自然の保全の好循環を生み出している広島県北広島町について調査・分析が行なわれた。

なお、第3章の「協働による生物多様性地域戦略の策定（徳島県）」は、査読付論文「生物多様性地域戦略を協働で策定するためのパターン・ランゲージ合意形成のプロセスデザイン技術―」（『景観生態学』2024年29巻P.75-9）を元に構成されている。また、第5章の「里地里山の持続的な協働管理（広島県北広島町）」は、査読付論文「地域生態系の協働管理・活用に関わる活動を促進するためのパターン・ランゲージ―広島県北広島町での協働の読解―」（『景観生態学』（2023年28巻1-2号P.49-67）を元に書かれたものである。

第6章では、第3章から第5章で示したパターン・ランゲージに加え、そのほかの地域での生物多様性や自然資本の保全や活用に関する研究や実践の経験を持つ専門家へのインタビューを通して、地域での協働実践を活性化するために、専門家がどのような働きかけを行うことができるのかを取りまとめられている。

第7章は、総合考察として、各章で提示したパターン・ランゲージについて比較を行うことで、その個別性と共通性が検討されている。また、各章を通して描き出された協働実践のパターンを元に、地域での生物多様性・自然資本の保全のための協働実践の創出と継続のために必要となる技術が協働のフェーズに基づいて考察される。加えて、本研究の対象領域において、パターン・ランゲージの形式でその実践知を記述することの意味が検討されている。

第8章では、終章として論文全体を振り返るとともに、本研究の限界と、今後の展望について述べられている。

本研究によって、生物多様性・自然資本の保全の協働についての各地・各人に蓄積されていた経験則が共有可能な形で記述され、地域の個別性や属人性から離れて実践に参照できる形でとりまとめられたことは高い評価に値する。また、そのことを通して、実践において重要となる知見を捉え直し、協働のフェーズごとにどのような働きかけが鍵となるのかをマッピングして示すことを可能にしている。また、本研究を通じて提示された専門家の実践のパターン・ランゲージは、生物多様性・自然資本の保全に向けた協働における実践を支援するための新しいツールとして位置付けることができる。

加えて、本研究は生物多様性・自然資本の保全の領域にパターン・ランゲージの方法論を活用した初めての研究であり、当該分野においても新たな可能性を切り拓いている。

生物多様性・自然資本の保全について、理念の浸透や政策の整備は進んでいるが、生物多様性の損失、自然資本の劣化は止まっておらず、どうすれば実質的に課題を解決していくことができるのかという課題認識はこれまでも提示されてきている。保全の効果が示されるには長期的な時間軸で調査を行う必要があるため、実践支援の実装と効果検証は、本論文のスコープとされていないが、今後の鎌田君の実践を通して本研究の成果が活かされ、社会変化に繋げていくことを期待することができる。

これらの成果は、鎌田君の高い研究遂行能力と、当該分野における豊かな学識を有することを示すものである。鎌田君は、地域レベルの協働を対象とした本研究と並行して、実務面では、持続可能な未来に向けてのエシカルでサステナブルなファッションや暮らしの探究・普及にも取り組んでおり、よりよい未来に向けて SFCらしい取り組みをしている。

以上より、審査委員一同は、本論文が当該分野の学術的發展に寄与する十分な成果をあげたものと判断し、鎌田安里紗君が博士（政策・メディア）の学位を受けるに値すると認めた。